
目覚めたらファンタジーな異世界でした。

雨と傘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目覚めたらファンタジーな異世界でした。

【Nコード】

N5353V

【作者名】

雨と傘

【あらすじ】

目が覚めたら森の中。そして何故か体が縮んでました。私を拾った研究者で魔術師な転生者のフェイさんによると、ここはファンタジーな異世界らしい。…うん、フェイさんの魔法が凄かったので魔法を使えるようになりたいです。そのうち。何故か4歳（推定）になってしまったハルキがファンタジーな異世界でそれなりに過ごす話。基本ほのぼの（を目指したい）恋愛要素ありません。

寂しい場所

真っ白い世界

どこまでも白くて白い世界

大地と空の境目などなく

風も吹かず、音もなく

冷たさもなく、暑さもなく

光もなく、影もない

そんな世界にその人はいる

白い髪

白い肌

白い服

白に満たされた世界で紅い唇を微笑みの形に歪ませて笑うのだ

私達の間にはなにもない

言葉も感情も思惑もなにもない

それでも彼女は笑う

私は…私は？

そして私は目覚ましの音で目を覚ます

体を起してあの白い場所が夢なのだと思います

そしていつも私は思うのだ

あそこは寂しい場所だと

プロローグⅡはじまり

だんだんと暗くなっていく森。纏わりつく風は冷たい。
遠くに聞こえる狼の遠吠えに恐怖が甦る。

怖い、寂しい。

ぼろぼろと涙が頬を伝う。

膝からは血が流れている。

ズキズキと痛み、それが恐怖に拍車をかける。

誰もいない森の中。

薄暗い森の中。

一人ぼっちの森の中。

一人は寂しい。

一人は怖い。恐いよ。

恐い、怖い、寂しい、いやだ。一人はいやだ。

いやだ、いやだよ。

ねえ、だれか……たすけて。

「なんで、こんな所に子供がいるんですか。」

光が、蛍のように飛んでいる。

淡い金色の光が、ふわふわと舞う。

その人は私を抱き上げて、大丈夫だと言ってくれた。
暖かさを感じながら、私は眠りへと沈んでいく。

涙が一筋、零れていった。

第1話：人生なにが起こるか分からない

誰かが言っていた。人生なにが起こるか分からないものだ。

私もそう思う。同感だ。

未来は誰にも分からない。だけど、なんとなく想像はしていた。

高校を卒業して大学に行って就職して恋愛なりお見合いなりして結婚するのだろうと。

子供は出来れば3人ぐらいで老後は田舎でゆつくりと過ごして子供や孫やできればひ孫に囲まれながら大往生。そんな人生だったら言う事なしだった。

自分が人を好きになるなんて想像できないけど。刺激的な人生が欲しかったわけではない。

けどもう一度言おう。人生なにが起こるか分からない。

とりあえず私の身に起こった出来事をかいつまんで説明しよう
学校の帰り道に貧血を起こして倒れて気が付いたら森の中にいて
なんか狼っぽいのに追いかけてられて美形な研究者で魔術師な転生者
に拾われました。まる。

わけが分からないだろうが、これが私の身に起こった事だ。詳しく説明していこうと思う。

私はしょっちゅう貧血を起こす訳ではないんだけど、たまになるんだよね貧血。遅刻しそうになって朝ごはん抜いたのが原因だと思うけど。朝ごはん食べればよかったと後悔しながらブラックアウト。

で、気が付いたら森の中にいました。

狼っぽいのは シーザ というモンスターだそうだ。三つ目……つまり額に第3の目があるモンスター。

毛色とかは私の知っている狼なんだけど、額に目があって怖かった。

しかも群れで追いかけてくるから怖かったよ。

そこを美形な研究者で魔術師な転生者のフェイ・クルーニクスに拾われた。

私は親しみを込めてフェイさんと呼んでいて、綺麗な女の人と間違えそうなほど綺麗な人だけど男だ。ベージュのような優しい色の髪と目をしている。

聞いたことないから推測だけど歳は20代後半。

そして、前世の記憶がある人だ。

たぶん前世は私と同じ所。いろいろと共通点があったし、間違いないと思う。

フェイさんにはいろんな事を教えてもらった。

ここが私がいた場所とは違う事。

エルフ族や獣人族といった種族が存在する事。

魔法という力が存在する事。

そして私の体が小さくなっているという事。

驚きや戸惑いもなく、それは事実としてストンと胸に落ちた。

フェイさんは私を取り乱したりすると思っていதாகしく、ちょっと驚いていた。

体が小さくなっていたのはちょっと困ったけど。ちょっと困っただけだった。

ちなみにフェイさんは光を操る魔法を使える。

実際に見せてもらったけど、とても不思議でとても綺麗だった。

私にも使えたらいいなってフェイさんに言ったら、今度魔力を調べれる道具を持ってきてくれるそうだ。

魔力は魔法が使える力で、魔力があると魔法を使えるんだって。ちよつと楽しみ。

以上が私の身に起こった事。本当に人生なにが起こるのか分からないよね。

あつちの世界で私がどうなっているのか気にはなる。だけど寂しいとか未練はない。

あつちより危険が多い世界だけど、帰りたいとは思わない。来てしまったのは仕方が無いと思うし、過去に戻る訳でもないから。どうして私なんだろうなーっていうのは気になるけど。

そんな私はフェイさんの家で家事とかをこなしながらこの世界の事を教えてもらっている。

いや、家というよりは屋敷といったほうが正しいかもしれない。

森に囲まれた屋敷。

体が小さくなって動き辛いけど、これはこれで新鮮。

カウハラ ハルキ

河原春樹 16歳。4歳になってしまいましたが、楽しくやっています。

第2話：胸がきゅってするのは

フエイさんが真剣な面持ちで紙に書かれた文字を読んでいる。
私は緊張しながら結果を待つ。
刻々と時間が流れる。

「…うん、問題はないですね。」
「やったー！」

思わずガッツポーズ。よかった、やっと終わった！

「まさか3ヶ月で書けるようになるとは思いませんでしたよ。」

今、私がフエイさんに教えてもらっていたのはこの世界の言葉の一つ。シェイア公用語。この世界ではほとんどの人が使える言葉だ。

「んー、頭の中にある知識と照らし合わせながらだから書けるようになるのが早かったのかも。」

「なんて言うか…ずるいですよ。私はこの世界に来た時は言葉が全く分からなくて苦労したのに。」

「不思議だね。私はこっちの言葉を知らないのに話せるし読めるなんて。まあ、シェイア公用語だけだけど。」

「それだけで十分ですよ。」

そう、なんでか分からないけど私はこっちの言葉が話せるし読める。

今フエイさんに教えてもらっていたのはシェイア公用語の文字。読めるんだけど書けるようになるまで3ヶ月かった。

「でも、自分の知らない言葉を当り前のように使えるのは変な感じ。ちよつと怖いかな。」

「…まあ、ラッキーだと思っておけばいいですよ。それより、紅茶が飲みたいです。そろそろお茶にしましょうか。」

フエイさんは紅茶が好きだ。1日に何回も飲む。もはや紅茶中毒と言ってもいいと思う。

「私は砂糖入れてね。」

「何言ってますか。ハルキも手伝うんですよ。」

「えー、4歳児に手伝わせるんですかー。」

「中身は16でしょう。」

ここに来て3カ月とちよつと。

軽口も言い合えるようになった。それが嬉しい。あっちでは、そんなこと出来なかったから。

胸がきゅつとなつて、温かい。

胸がきゅつて苦しくなるのは、悲しい時だけじゃないんだね。

「…? どうかしました?」

「なんでもなーい!」

閑話：『あっち』と『こっち』

「ねーねー、フエイさん。」

「なんですか。」

「ちょっと思っただけだね、前の世界の事を『あっち』って言うてこの世界を『こっち』って言うてるよね。」

「…そういえばそうですね。」

「混乱しない？」

「しないと思いますよ。」

「絶対するって！で、提案なんだけど。
あっちを『科学世界』って呼んでこっちを『魔法世界』って呼ばない？」

「…そのまんまじゃないですか。」

結局、私が考えた案は使われなかった。理由はややこしいから。いいと思うんだけどな、『科学世界』と『魔法世界』。

第3話：初めての外（1）

それは半年がたった頃。始まりはフエイさんの言葉だった。

「ハル、インクがどこにあるのか知りませんか？」

「知らないけど…インク切れたの？」

「そうなんですよ。仕上げないといけない資料があつて。困りましたね。」

…そうだ、明日『市場』に行ってみませんか？」

「市？それって私が知っているのと同じ？」

「同じだと思いますよ。いろんなものを売っている場所です。ハルキは外に出たことないでしょう。」

「…そういえば森の外に出たことない。」

よく考えたら街とかに行つたことがない。食料とかは運んできてもらつてるし。庭広いし、散歩なら森を歩けばいいし。

「ね。行ってみませんか？」

用事があるから、ついでに見て回りましょう。」

「うん、いいよ。」

そんなこんなで、初めての外出決定。

…ちよつとめんどいと思ったのは秘密。

第4話：初めての外（2）

第一印象は『賑やか』だった。

ずらりと簡易な店が並んでいて、人の声が溢れている。見た所、食べ物売っている店が多いみたいだ。屋台っぽい店もある。いい匂いだな！。

「フェイさん、いい匂いがするね。」

「いつもこんな感じですよ。」

「へー。」

私の今の恰好は目深に帽子をかぶって、シンプルな半ズボンはいている。帽子の中に髪を全部入れているから男の子に見えると思う。

フェイさんが言うには黒眼は珍しいから、隠しとけだそうだ。

「とりあえず、用事を済ましてから見て回ってみましょう。」

「賛成。」

フェイさんに手を引かれて歩き出す。こういつ時さりげなく手を引いてくれる所が優しいと思う。

「フェイさん、あれなんですか？」

「あれは『リママ』という葉物野菜です。苦味があります。」

「じゃあ、あの吊るしてあるのは？」

「『ハシユムル』です。」

南の方で獲れた魚を干したもので、『ハシユムル』は魚を干したものの総称です。

この辺りは海が遠いですから、新鮮な魚介類が手に入りにくいんですよ。

その代り、森や草原などが多い。

だから新鮮な野菜や果物が多いんです。」

「へー。」

どれも初めて見るものばかりで楽しい。

知らないものばかりで、質問ばかりしてしまう。

「…ああ、ここですね。」

綺麗な柄の布が並べられている店の前で止まる。ほかには食器や本が数冊山積みになされていたり、色々な物が置いてある。

「なんか、ごちゃごちゃしている店ですね。」

「雑貨屋みたいなですよ。」

「いませんね。…おーい！」

フエイさんが大きな声を出すと、店の奥から物音がした。のそのそと大きい影が歩いてくる。

「ほいほい、なんのご用ですか…。」

店から出てきたのは、熊みたいなおじさんだった。

第5話：初めての外（3）

「ん？」

店から出てきた男は私達を見て、訝しげな顔をした。だけど、次の瞬間には凄く嬉しそうな顔になった。

「おー！フエイじゃねえか！

ひっさしぶりだなー！元気にしてたか？」

店から出てきた男は豪快に笑いながらフエイさんの背中をバシバシと叩く。

なんか、熊みたいな人だ。

頭には布を巻いているから、工事現場のおじさんみたい。

「ん？お嬢ちゃんは坊主の連れか？めっずらしいな！お前が誰か
とここに来るなんて。初めてかもしれんぞ！」

おじさんがしゃがんで目線が同じ位置になる。

あれ、この人耳が長くて尖ってる。

それに布の間から見える髪の毛が緑色だ。

もしかして…。

「お嬢ちゃん、名前はなんだ？」

これ、答えた方がいいのかな？

ちらっとフエイさんを見たら頷いた。

「…ハルキ。フェイさんにはハルって呼ばれてる。」

「おーそうなのか。歳はいくつなんだ？」

「…4歳。」

「そっか、4歳か。しっかりしてんなー！

村の悪ガキどもに見習わせたいぐらいだ。

ちゃんと答えられた良い子にはこれをやろう！

ほーれ、手え出せ。」

慌てて手を出すと、手のひらにコロコロと丸い物が落ちてきた。
なんだろう、これ。色は茶色で、クッキーみたいだ。

「フェイさん、これなに？」

「『クク』というお菓子ですよ。」

「女房が作ったやつだ。絶対うまいから一回食べてみるって！」

女房ってことは奥さんいるんだ。

『クク』はほのかに甘いにおいがするから、甘い物なのだろう。
おそろおそろ口に入れてみる。

「どうだ？」

「…おいしい。」

口の中でほろほろと崩れる。

ほろ苦くて、ココアみたいな味だ。

「そつかそつか！そりゃあよかった！」

お礼とか言った方がいいよね。

「…おじさん、ありがとう。」

「どーいたしまして！」

そーいや、まだ名前言ってなかったな。
俺の名前はジエイドだ！」

「ジエイドさん？」

「さんは付けなくていいぞ。」

「じゃあ…ジエイドおじさん？」

「お！いいな、そのジエイドおじさんっていうの。」

ぼむぼむと頭を撫でられて、ちょっと帽子がずれたと思ったたらジエイドさんが直してくれた。

なんか恥ずかしい…嬉しさもあるんだけど。

第6話：初めての外（4）

「…鼻の下伸ばしてないで仕事してくださいよ。」

「おー、悪いな。で、なにが必要なんだ？」

フエイさんを見ると、ムスツとしていた。

ジェイドおじさんはちよつとニヤニヤしている。

…なんで？

「いつものインクを多めに。」

「了解。ちよつと待ってる。」

ジェイドおじさんが店の中に入っていく。

出てきたと思ったら、小さな木箱を持っていた。

「ほい、これでいいか？」

「はい、大丈夫です。」

そういうと、フエイさんはジェイドさんに何かを渡した。

よく見えなかったけど、お金だと思う。まだ知らないから、教えてもらわないとな。

「ちよつと市場を見て回るんで預かっておいてもらえませんか？」

「ああ、いいぞ。見て回るってことはハルキは市は初めてか！」

それなら、あっちの広場で面白いのがあるぞ。」

「そうなんですか。行ってみましょうか、ハル。」

「うん。」

また後で、とジェイドさんと分かれて歩き出す。
面白いのってなんだろう。

第7話：初めての外（5）

店からだいぶ離れた。

ちよつと疑問に思つた事を聞いてみる事にした。

「ねー、フエイさん。

ジェイドさんつてもしかして『エルフ族』？」

「…あれ、ハルにエルフのこと教えましたっけ。」

「うつん、まだ教えてもらつてない。

だけど、本でちよつと読んだ。」

「そうですか…。」

本って事は、もしかして『あの部屋』の本じゃないですよね？」

「え、ダメだった？」

「いや、ダメというわけではないんですが。

危ないですから、今度からは私に一言言つてからにしてください。」

「はい。で、ジェイドさんは『エルフ族』なの？」

「そうですよ。」

「やっぱり。だけど、エルフって色白で細いイメージがあったから

ちよつとびつくり。

挿絵のエルフもそんな感じだったし。」

「まあ、そうですね。」

エルフにもいろんな人がいますよ。」

「へー。」

第8話：初めての外（6）

広場に着くと、沢山の人がいた。軽やかでリズムの良い音楽も聞こえてくる。

なんか、面白そう。だけど、人で見えない。こういう時体が小さいと不便だなー。

「ハル、見えないでしょう。抱っこしましょうか？」

「うーん…。」

抱っこしてもらえば見えると思うけど…。

むー、と悩んでいると今の私と同じぐらいの子供の声が聞こえた。父親らしき人に肩車してもらって、きゃっきゃと笑っている。

…あ。

「フエイさん、肩車して。」

「肩車ですか？」

「うん、肩車。」

肩車やったことないから、やってみたい。」

「いいですよ。」

フエイさんに両脇を抱えられて、肩に乗せられる。

…私、しゃがんでもらって肩に乗つかるのをイメージしてたんだけど。

「どうですか？」

「すごい高い。」

景色が一転した。

見上げていた物が、下の方にある。空が近くて、風が気持ちいい。ちよつと不安定だけど、フェイさんが支えてくれているから大丈夫。

目線が高くなつたおかげで、見えなかったものが見えるようになった。

人の中心で女の人が踊っている。腰には長い布を巻いていて、踊るだびにひらりと舞う。

後ろにはトコトコと太鼓に似た楽器を叩いている人がいる。

そして周りにキラキラと水が舞っている。

踊り子が舞うたびにサラサラと動いて、きれい。

「すごい。あれがジエイドおじさんが言っていた、面白い物？」

「そうですよ。」

『人魚の舞』という踊りです。

元々は雨乞いや荒れている海を沈めるなどの『水』に係する儀式でした。

ですが今では踊りの一つですね。

ここからでは見えないですけど、踊り子の腰に巻いてある布は鱗の模様なんですよ。

それで、人魚を表しているんですね。」

「へー、そうなんだ。」

太鼓の音がだんだんと早くなっていく。

それと同時に踊りも早くなって、水の動きも早くなる。
くるくると水が舞う。水の中で人魚が舞う。

無性に、人魚という存在に会ってみたくなった。

第9話：初めての外（7）

『人魚の舞』が終わると、私達はいろんな所を見て回った。

アクセサリー屋みたいな店には若い女の子がいて、あちこちでおばちゃんが話していた。

屋台のおじさんはちよつと顔が怖かったけど、売っていたお団子っぽいものはとてもおいしかった。

歩きまわって、食べて、たくさん話して笑って。とても楽しかった。

歩き疲れてしまつて、今はフェイさんに抱っこしてもらっている。瞼が重くなつてきて、目をこする。

「ハル、眠いんですか？」

「…うん。」

「寝ててもいいですよ。」

「…うん。」

とろり、と眠気がやってくる。

「おやすみ、ハル。」

優しいフェイさんの声。暖かい腕はなんだか安心する。柔らかな眠気に誘われて、私の意識は沈んでいった。

side・フェイ：いつか、離れてしまっけど

腕の重みが少しだけ増した。ハルの顔を見れば、すやすやと眠っている。今日は歩きまわったから疲れたんだろう。

ハルが来てからもうすぐ4カ月。

ハルは凄い早さでこの世界の知識を吸収している。
教えている時のハルはとても楽しそう。興味深々、という顔をしている。

それで教えるのが楽しくて、沢山の事を教えてたくなる。

恐らく、ハルは私と同じ世界から来たのだろう。

私は一度死んで、この世界に生まれた。

その事実が受け入れなくて、昔は全てを拒絶していた。残してきたものを想って、泣いた事もあった。

あいつに出会っていなければ、まだ世界を拒絶していたのだろう。

…もしかしたら、世界を壊そうとしていたかもしれない。

でけどハルは世界に戸惑う事もなく拒絶する事もなかったただ受け入れた。

体が幼くなっていることも知らない言葉が分かる事も受け入れた。
元の年齢は16だと言っていたが、大人びていると思う。

…いや、大人びているのではない、達観している。諦めているようにも感じた。

「あー、寝ちまったのか。」

「疲れたみたいですね。」

眠る顔は安心して見ようにも見えて、信頼されていると思うと嬉しい。

「しかし、お前が人を連れてくるなんて驚いたぞ。しかも仲良く手を繋いでなんてな。」

「ハルキは、お前の家に住んでるのか？」

「はい。」

「そうか。お前が傍に誰かを置くななんてな。しかも一人前に嫉妬なんてしやがって。あれは笑えたぞ。」

「ほつといてください。」

「あれはちょっと…横取りされたみたいで嫌だったんですよ。」

「横取りねえ。…お前ももう父親かあ。」

「たしかに、養父みたいなものですけど血は繋がってませんよ。」

「俺には父親のように見えるけどな。」

「そうですか。」

「父親か…。いまいち、ピンとこない。」

「けどもし子供がいたら、こんな感じなのだろうか。この子の成長が嬉しくて、楽しみで。心配で、待ち遠しい。」

「なあ、フエイ。」

「なんですか？」

「…この子は『風』だよ。」

「…。」

「風に舞う綿毛みたいにふわふわと飛んで行っちまいそっだ。飛んで行かないように見とくんだぞ。」

「言われなくても。」

言われなくても、分かっている。

森の中で泣いていたこの子を見つけた。これもなにかの縁なのだろう。

「…あつはつはつは！やっぱりお前は父親だよ。顔が父親だ！」

真剣な顔から一転、豪快に笑う。

この人は本当に変わらない。

「どんな顔ですか。」

早く帰りたいんで預けていたの返してください。」

「はいはい、分かったよ。」

ジェイドが苦笑しながら店の中に入っていく。

ハルキを抱えなおすと、帽子がずれた。

この世界にも、黒髪黒眼の人間はいる。南のほうの物凄く超田舎にいます。それに私は東洋人のような人にこの世界で会った事

が無い。

どこの世界でも物好きはいる。目をつけられたら危ない。

…頼んでいた物、早めてもらうか。

顔立ちは変えられなくても、目の色が変わるだけで印象は結構変わるからな。

「ほれ、これでよかったよな。」

「はい。…あれ、これは？」

インクが入っている木箱の上に、買った覚えのない物がおいてある。羽がいくつか付いた紐で、紐の両端には細工の施された銀色の金具が付いている。

「髪を結ぶやつなんだが、ハルキに似合うと思ってな。」

「いいんですか？」

「ああ、いいともさ！

お前の娘は俺の孫だからな！」

その言葉に目を見張った。

この人は…。あんなに拒絶していた『俺』を、『息子』だと言ってくれるのか。

「…ありがとうございます。」

オババさまに、その内顔を出すと言っておいてください。」

「おー、分かった。」

ほれ、早くしないと日が暮れるぞ。」

「はい、それじゃあ。」

ハルを片手に抱えなおして歩き出す。

反対には木箱を持っているから、ちよつと重い。

この子との生活は、思っていたよりも心地よい。

だけど、ずっと一緒に暮らせるわけではない。私は、人であつて人で無い。だから、いつか別れの日が来るだろう。それは、絶対不変の未来だ。

だけど、その日が来るまでは。

その日が来るまでは、見守っていたい。

沢山の事を教えて、沢山の事を経験させてやりたい。

もしかしたら、前の世界に帰ってしまうかもしれないけど。

帰りたいと願っているかもだけど。

世界を越えて、離れてしまふかもしれないけど。

同じ世界にいても、離れてしまふだろうけど。

それでも。

腕の中の存在を、この重さを離してしまわないように。落としてしまわないように。抱きしめた。

s i d e ・ フェイ：いつか、離れてしまっけど（後書き）

フェイにも色々あったんですよ、な話。

フェイの過去はそのうち詳しく書きたいと思っている。

第10話：本の部屋（1）

フエイさんは研究者だ。

仕事柄、資料や参考文献といった本が多い。

だから、『本の部屋』という部屋がある。これは私が命名したんだけど、とにかく本が置いてある部屋だ。貴重なものはフエイさんの書斎に保管してあるんだけど、必要なくなった資料は『本の部屋』にある。というか溜めこんである。

『本の部屋』は、埃っぽい。だけど前よりはだいぶ綺麗になった。私は『本の部屋』を掃除・整頓するのを日課にしている。…ただなかなか進まないんだよね。

「よっし、今日も頑張るぞー！」

埃を掃いて、床を拭いて、本を整頓する。

手前から掃除して欲しい、3割ぐらいは終わったと思う。

奥の方には、天井に届きそうなくらいまで積まれた本もある。こんなになる前に掃除しようよフエイさん。

「…これ、どうしよう。」

私の身長より高く積まれた本をみて、思わずため息が出る。持ち上げるのは無理そう。とりあえず、上の本から掃除しようかな。

一番上の本を取ろうと手を伸ばす。

…届かない。

つま先立ちになってみる。

うーん…あともうちよつとで届きそう。

「ふんにゆっ！」

変な掛け声が出た。ちよつと恥ずかしい。

思いつきりつま先立ちをして、手を伸ばす。

あと、もーちよい…。

「取れた！……げっ。」

ぐらり、と本の山が揺れる。バサバサと音を立てながら本が降ってきた。

「うっ、いたい…。」

頭に本が当たって痛い。

涙目になりながらズキズキする頭を押さえる。私の周りには本が散乱していて、掃除して整理した本も…。

「折角、きれいにしたのにまたやり直し…。」

なんか、掃除するのが嫌になってきた。

とりあえず、埃が酷い本から綺麗にする。

埃を拭き取ると、霞んだ文字が見えてきた。

題名は『灰かぶり姫』。なんとなく、見た事がある。

…たしかシンデレラは『灰かぶり姫』という意味ではなかっただろっか。

内容が気になって読んでみると、読んだことのある話だった。

いままでも、あれ？と思うような本があつた。偶然だと思つて
いたが、ここまで同じだと偶然だとは思えない。

第11話：本の部屋（2）

「フェイさん、こんな本見つけたんだけど。」

書齋にいるフェイさんに聞きに行った。

「フェイさんは本を受け取ると、「よく見つけられましたね。」と言った。」

「その本、シンデレラだね。なんでこっちに同じ本があるの？ほかにも読んだことのあるような童話とか昔話とかがあったんだけど。」

「昔、私もそれが気になって調べた事があったんですよ。」

これを書いたのは『ジェア・ホルルス』という人でしてね、『見覚えのあるタイトル、読んだことのある話』を多く書いている人です。」

「見つからない本はないと言われるほど巨大な図書館を作ったことで有名な人で…たしかその子孫が代々館長を務めているそうですよ。」

その話を聞いて、私は1つの可能性を思いついた。

「もしかしてその人、私達と同じ世界から来たんじゃない？」

「そうだとしても、確かめようがありませんよ。もう、2000年以上前に生きた人ですから。」

「そうなんだ…。」

あーもう、なんかスッキリしないなーっ！」

見えそうで見えない。2000年という長い歳月が『ジェア・ホルス』を霧で覆い隠している。そのことにモヤモヤとして煮え切らない気持ちになっていると、なにか考えていたフエイさんが口を開いた。

「…今度、行ってみましょうか『ホルス図書館』。

今は論文が立て込んでいて無理ですが、これが終わったらしばらくは何も無いですし。」

「フエイさん、行ったことあるの？」

「ないですよ。行ってみようとは思っていたんですけど、なかなか行けなくて。ですから、この機会に行ってみようと思うんですけど。」

「…うん、私も行きたい。」

もしかしたら、私達と同じ所から来たのかもしれない人。もう会えないけど、私はその人が残した物を見たい。この世界で生きた形跡を見たい。

第12話：朱色が運ぶ知らせ

「え…友達って事なの？」

「違います。知人です。」

ある日の午後。

やる事も終わって、私は庭で日向ぼっこをしていた。

そのに急にフェイさんが来て「人が来る。」と言われた。しかも、何故か肩に鳥を乗せながら。

「そうなんだ…。」

っていうか、フェイさん知り合いがいたんだね。」

「どういう意味ですか。」

いやー、だつてさ。

この家に来るのは食料とか運んでくれるお兄さんだけだったし。

フェイさんの知り合いとかが、訪ねてきたのって一度もなかったから。

フェイさんもフェイさんで、ずっと研究ばかりだし。

あ、でもジェイドおじさんが知り合いになるか。

「前に言っていた、魔力を調べる道具をついでに持ってきてくれるそうですよ。」

「そういえば、そんな話もあったね。」

それで調べれば、魔法が使えるようになるの？」

「訓練次第です。」

すっかり忘れていたけど、私にも魔力があるんだっけ。

魔力は魔法の源。魔力があると魔法が使える。

だけど、魔力には『属性』があつて、それを調べないと使えないんだっけ。

「そっか、訓練次第か。」

で、その鳥はどうしたの？」

鳥はずっとフェイさんの肩に止まっている。

大きさはインコぐらい。色は鮮やかな朱色だ。

「ああ、これですか。」

この鳥は『エルク』といいます。手紙を運ぶ鳥ですよ。」

「へー、そうなんだ。」

エルクは小首を傾げたり、ちょこちょこと動いたりする。

それに合わせて長い尻尾がふりふりと揺れる。

「…ちよつと、触つても大丈夫？」

「大丈夫ですよ。」

ゆつくりと、驚かせないように近づく。

近づいても逃げない。人慣れしてるのかな？

まあ、フェイさんの肩で大人しくしてたし、人慣れしてるよね。軽く頭を撫でてみる。

気持ち良さそうに目を細める。

「かわいい。」

ぽわぽわしていて、ちょっと暖かい。
かわいいな！。

「ハルは、動物が好きなんですか？」

「え？…うーん、嫌いではないよ。」

「そうですか。」

フエイさんがエルクに手を近づけると、ちょこんと飛び乗った。
手乗りインコみたいだ。

「手紙の返事を書き終わるまで、遊んでていいですよ。」

「いいの？逃げたりしない？」

「大丈夫です。」

エルクが止まっている手に、私の手を近づける。
すると少し躊躇した後、私の手に飛び乗った。
軽い重み。

「ありがとう、フエイさん。」

鮮やかな朱色の小鳥。
青い空に飛んだら、綺麗なんだろうな。

第13話：第一印象はダンディー

その人は、『竜車』に乗ってやってきた。

「フェイが子供を拾ったっていうから来てみれば、なんとも可愛らしいお姫様だ。かの月の妖精も君を見れば裸足で逃げだすだろう。ほう、君の瞳は遠くからだと夜空のような色なのに近くで見ると琥珀のようだね。なんとも不思議で、引き込まれそうになる色合いだ。」

私の手を取り、口説き文句を言っているこの男はフェイさんの友達らしい。

白髪まじりの黒い髪にシルバーグレイの目。

一言でいえばダンディーな人だ。チョイ悪おやじでもいい。

歳は…50代ぐらいだと思う。

対して今の私は5歳ぐらい。…守備範囲広すぎませんか？

「えっと、ありがとうございます?」

あと手を離してくれると嬉しいです。

「…変わらないですね、あなたは。女性と見れば見境無しですか。」

「私が口説くのは魅力的なレディーだけだよ。」

あ、やっと離してくれた。

「ああ、自己紹介がまだだったね。

私の名前はサム・シエラス・カーウエル。フェイの古い友人なんだ。」

「私は、…ハルキです。」

「ハルキ…可愛い名前だ。」

カーウエルさんは情熱的な人らしい。

窓を見れば、カーウエルさんが乗ってきた竜車が止まっている。クリクリとした目、走るのに特化しているのか、前足は小さい。

大きさは馬より少し小さいぐらいだろうか。車には2匹繋がれている。

すごい気になる。

だって初・ドラゴンだよ。

しかも馬みたいに車を引っ張ってきたんだよ。

「あの、カーウエルさん。」

「なんだい？お嬢さん。」

「あのドラゴンって触っても大丈夫なんですか？」

「ミニラをかい？」

へー、ミニラっていうんだ。

触るとどんな感じなんだろう。やっぱりトカゲみたいなのかな。

ワニとかに近いかも。触ったことないけど。

「大丈夫ですよ。ミニラはおとなしいですし、人に慣れてますからね。」

そうフエイさんが言つと、カーウエルさんは少し考えるような素振りをみせた。

「そうだね、御者が世話をしているから、言ってみるといい。」

「はい！」

s i d e ・ フェイ：旧友（前書き）

お気に入り50件突破しました！
本当にありがとうございます！
感謝感激です。

side・フエイ：旧友

外では、ハルキがミニラを嬉々として撫でている。

その顔は本当に嬉しそうで、初めてのドラゴンに興味津々のようだ。

「あの位の子はミニラを怖がるんだけどね。
お転婆なお姫様だ。将来が楽しみだな。」

満足げにうなずく目の前の男は、出会ってから30…いや、40年は経つのに変わらない。

呆れるほどの女好き。女と見れば見境無し。…いや、こいつに言わせれば魅力的なレディーだけだったか？どこからどこまでが魅力的な女性になるんだ。こいつが口説かなかった女は見た事が無い。

「だが、まあ…手紙には驚かされたよ。お前が子供を拾って、更には育てるなんて書いてあるんだからな。しかも女の子ときた。本当はもっと早く来たかったんだが、忙しくってな。」

「…ここに来れたって事は、引退したってことですか。」

「ああ、やつとだよ。これで俺も隠居できる。」

サムは、貴族だ。

この世界ではミドルネームがつく者は貴族階級以上。位が高くなるほどミドルネームも多くなる。

今は平民が来ているような服を着ているが、よくみれば目立たないような刺繍がされている。着心地もいいのだろう。

息子に家督を譲って隠居するとは手紙で知っていたが…時間がた

つのは早いな。

「とりあえず金と時間はあるから観光をしようと思ってな。そのついでに寄ったんだが…いやー、来たかいがあったな。…と、忘れるところだった。頼まれていた物、持って来たぞ。」

紙の束と布に包まれた物が机に並べられる。

「属性検査用紙は5枚もってきた。これは魔力を流すだけのタイプだから5枚あれば大丈夫だろう。」

そっちは注文通りに出来ている。」

布に包まれた物を手に取り、布を開いていく。

「風属性の魔石を使って、目の色を変える術式が彫られている。それを作らせた職人が、これがまたいい女だな。紅い髪に紫の瞳…。情熱的で神秘的。つれない所がさらに魅力を引き出してな」

布に包まれていたのは、一对のピアス。

予想していたのよりも小ぶりで、普通のピアスにしか見えない。よくここまで小さく出来たものだと感心する。

「凄いな…『魔道具』だとは思えない出来栄だ。」

文句無しの出来栄ですよ。いい職人が見つかりましたね。」

「ああ、アリアって言うんだが…独学で魔石や魔法陣について研究しているらしい。」

「そっなんですか…。」

ピアスを布に包み直す。

「何のために作ったのかと思っていたが…あの子を見て納得したよ。あの目は珍しすぎるな。髪が黒いとだいたい目は俺にみたいに灰色なんだが。遠くからだと黒、近くで見ると茶色。確実に狙われるだろうな。目をつけられたら逃げられない。」

この世界にも、好事家はいる。

ああいう奴らは珍しいモノを常に求めている。

「だけど、黒い髪に灰色の目は一般的です。ありふれた色。これはハルキを守ってくれます。」

守ってくれなくては困る。

ずっと、ハルキの傍にいて守れる訳ではない。

いつかは離れて、あの子は一人で歩かなくてはいけなくなる時が来る。

かならず、来てしまう。

「…お前、これからもあの子を育てるつもりか？」

「？もちろんですよ。」

急に何を言い出すのだろう。

だが、サムの目は真剣そのものだ。

「あの子にはもう話したのか？
これから先、一緒に暮らすのならちゃんと話しておけ。ずっと隠していける訳が無いんだ。」

「…わかって、ますよ。わかってはいるんですけどね。なかなかタイミングが掴めなくて。」

あの事をハルキに話す事は、自分に対してのけじめでもある。大丈夫。話します。

だから、そんな心配そうな顔をしないで大丈夫ですよ。

「…そういえばな、学園に天才が来たんだよ！」

「へえ。『天才』ですか。」

「ああ、まだ3年目なんだが、もう終わりそうな勢いだ。教師連中も舌を巻いているよ。」

姉のほうは普通なんだが、こっちもこっちで薬学がずば抜けていい。」

暗くなった空気を払拭しようと、話題転換をする。

気を使ってくれたのだろう。

貴族同士の腹の探り合いは得意なくせに、こういう所は変わらないい。

全てが変わり流れ続ける中で、変わらないものがあるのは嬉しい。

だけど、俺は止まっている。

変わらないのではない、止まっている。

俺を置いて世界が変わっていく、進んでいく。

俺は停滞したまま、動けない。

俺は、動けない。

満足したハルキが帰ってくるまで、あと50分。

酒を片手に談笑するフェイ達に遭遇するまであと1時間。

酔ったサムに頼ずりされて、髭が痛いと言ハルキが思っまであと2時間。

ミニラがハルキに懐くまであと10分。

世界が動き始めるまであと…？

s i d e ・ フェイ：旧友（後書き）

ちよつと、伏線頑張ってみました。

サムは女好きなダンディーなちよつとおじいちゃん寄りなチヨイ悪
おやじをイメージしています。

第14話：私の立ち位置

なんだか最近、フェイさんの様子がおかしい。

嵐の如くサムさんが到来してから、なんだか挙動不審だ。（ちなみに、サムさんはこれから世界一周をするらしい。）なんとなく視線を感じて振り返ると、フェイさんがいて顔を逸らされたり、話しかけても上の空だったり…変だ。変な事でもしちゃったのかな、私。耳に付けてあるピアスをなんとなくいじりながら考える。（特に細かい装飾の無いシンプルな物だけど、結構気に入っている。このピアスを付けた途端に目の色が銀色というか灰色に変わった。ビックリ。）…うん、覚えが無い。

「~~~~~ん~~~~~」

唸ってみても、原因がさっぱり分らない。だけど、もしかしたら無意識にしちゃってたりとか？だったら、言ってくれたらいいのに。だって

…あれ？

そういえば、私とフェイさんの関係って何なんだろう。

あれ？あれ？

なんか、疑問にも思わず暮らしてたけど、なんでフェイさんはここに私を置いてくれてるんだろう？フェイさんは、転生した前世の

記憶がある人で…同郷のよしみで、なのかな？
だとすると、私は居候ってことだね。

わからない。フェイさんは、私の事をどう思ってるんだろう。だって、滅多に外に出ないし、こんな森の奥に引きこもってるし、まともな来客なんてサムさんが初めてだった。もしかして、邪魔だと思ってるのかな。あ、けどいろいろとこの世界の事を教えてくれる。邪魔だと思ってたら、教えない…よね？

一回りも二回りも小さくなった手を見つめる。
子供らしい、プニプニとした小さな手のひらは、最初の頃は違和感だらけだったが、今はもう慣れた。

なんで、小さくなっちゃったんだろう。そのくせ中身はそのままで、大人でも子供でもない中途半端。どうせなら精神も幼くなればよかったのに。そうすれば、悩む事もなかったのかなあ。ただ疑問に思わず流されるままに、暮せたのだろうか。

…うん、やめやめ。考えても、仕方が無い事だ。

ザアツと風が起きて、髪紐で結った髪がなびき、木々が風に揺られてザワザワと音を立てる。それは心地よく心に響いて、不安で淀んでいた心を落ち着かせた。

今度、フェイさんとちゃんと話をしよう。怖いけど、このままにしておくのが一番ダメだと思う。そのうち、ちゃんと。すぐに聞こうと思えない、先延ばしにしようとする自分の弱さが恨めしい。

もうすぐ、私がここにきて一年が経とうとしていた。

第15話：魔力

「これが魔力検査用紙です」

なにも書かれていない短冊大の紙を持って、フエイさんは説明を続ける。

「一見何も書かれていないように見えますが、特殊なインクで魔法陣が書かれています。魔力は火・水・風・土・光・闇の6種類。更に氷・雷・影・植物などの亜系を含めると10種類になりますが、これはまず出ないと思うので省略します。検査方法は魔力を流すだけ。」

すると、フエイさんの手にある検査用紙にじんわりと模様が浮かび上がってきた。細く複雑な模様はだんだんと濃くなり、金色の模様が浮かび上がった。

「火は赤・水は青・風は銀・土は茶・光は金・闇は黒。私は光属性なので金色になります。では、やってみてください。」

フエイから紙を手渡される。

「…フエイさん、質問です」

「为什么呢？」

「魔力ってどう流せばいいんですか？」

「あー…そうですね…、こう、気合を込めて…みたいな感じですかね？」

「全然分かりません」

早くも壁にぶつかった。とりあえず魔力は生命エネルギー的なものらしい。万物に宿る物で、特殊な能力を持たない限り見る事の出来ない物。強かったりすると感じたりは出来るらしい。

「まあ、そもそも魔力の定義については研究者の中でも意見が分かれてるんですよ。選民説や万人説が主流なんですけどね。」

「へー」

とりあえず、手に力を込めて送り込む感じにする。変化なし。はあああつ！と掛け声を出してみても変化なし。

「…フエイさん。私って本当に魔力を持ってるんですか？」

「持ってますよ？同類な感じがしますし、属性もなんとなく予想がついてますしね。」

「え、じゃあ必要ないんじゃない？」

「頑張ってください」

につこりと声援を送られるが、拒否は許しませんが威圧感が。まあ、私も魔法使ってみたいし、やるけど。なんともなしに手に持っている紙を見つめる。

魔力…生命エネルギーってこう…血みたいに全身を巡っているのな事を漫画か何かで見た覚えがある。とりあえず、ぐるぐると形のないエネルギーが全身を巡っているのを想像してみる。…なんかしっくりこない。どちらかというと、巡るというよりは発せられているイメージ。体の中心…魂とかからエネルギーが出ているのを想像する。…うん、しっくりきた。

目をつぶり、想像する。

体の中心、胸のあたりから熱のように魔力が伝わって、手に流れていく。それを紙に送り込む。じわりと体に留まっていた物が外に放出されていく。

「あ…できた」

目を開けると、紙に模様が浮かび上がっていた。銀色だ。

「風ですね。良く出来ましたねハルキ。予想ではできるまでに何日が必要だと思ってたんですが…」

偉い偉いと頭を撫でられる。…急にどうした。だけど、意外と気持ちよくて頬が緩む。

すると、頭を撫でる手が止まり、離れていった。フエイさんを見ると、顔を逸らされた。

「…？どうしたの？」

「あー、うん、なんでもありません。それじゃあ明日からでも魔法の

特訓しますか！」

なんとなく顔を背けてフェイさんが言う。やっぱり、様子が変だ。

とりあえず、私の魔力は風属性らしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5353v/>

目覚めたらファンタジーな異世界でした。

2011年12月25日21時53分発行